The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	国木田独歩と『聊斎志異』 : 「竹青」と「王桂庵」を中心に
Author(s)	陳, 潮涯
Citation	阪大近代文学研究. 2018, 16, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68146
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

国木田独歩と『聊斎志異』
――「竹青」と「王桂庵」を中心に――

陳 潮涯

はじめに

先行研究(1)によれば、明治以後の日本で最初に『聊斎志異』を現代日本語に翻訳したのは国木田独歩であった。彼は一九〇三年の三月、矢野龍渓の招聘を受けて『東洋画報』（後に『近事画報』と改題する）の編集長に着任し、同年の五月に「黒衣仙」（原題「竹青」）と「船の少女　上」（原題「王桂庵」）を、同年六月には「船の少女　中・下」を同年七月には「石清虚」（原題「石清虚」）、同年九月には「姉と妹」（原題「胡四娘」）を、同誌で立て続けに発表した。さらに、その三年後の一九〇六年、独歩が編集に加わった『支那奇談集』(2)が刊行され、先述した四篇の翻訳とともに総計五十四篇の『聊斎志異』訳を収録した同書は、本格的な『聊斎志異』の訳書である柴田天馬の『和訳聊斎志異』（玄文社、一九一九年）が出る以前において、『聊斎志異』を最も多くの話数収録した翻訳小説集にあたる。ゆえに、独歩は『聊斎志異』の近代日本受容と非常に深く関わった文学者であると思われる。

『聊斎志異』にはさまざまな版本があり、各版本は、題名や文章、さらには収録される話においても異なっている。これまで『聊斎志異』の版本研究は、どの版本が蒲松齢の原文に近いかという点については考証を重ねてきたが、その中でどの版本が海外に受容されたかという問題にはあまり触れていないため、『聊斎志異』の海外受容の面で各版本のもつ影響と価値が評価されてこなかった。先行研究(3)においては、初めて江戸に伝わってきたのは「青柯亭本」(4)（以下「青本」と表記）とされてきた。「青本」を底本として、江戸後期から『聊斎志異』の翻案と翻訳(5)は次々現れた。しかし、詳しくは後述するものの、独歩が最初に『聊斎志異』を翻訳した、即ち、「竹青」と「王桂庵」を翻訳した際には、恐らく王金範刻本(6)（以下「王本」と表記）が底本とされている。「竹青」と「王桂庵」の翻訳作業を終えた後、彼は「青

本」系統の『聊斎志異』を入手した。その後、一九〇三年七月の「石清虚」の翻訳から一九〇六年の『支那奇談集』の刊行に至るまでの期間に独歩が底本としたのは、「青本」系統だったと推測される。要するに、独歩は二つの版本を用いたのである。

本稿は、「竹青」と「王桂庵」を独歩訳と比較し、独歩が所持した版本の問題を明らかにするとともに、独歩訳の特徴ならびに独歩の『聊斎志異』に対する理解の深度を論証しようとするものである。

本稿に所引の「舟の少女」「黒衣仙」は関西大学総合図書館所蔵『東洋画報』(近事画報社、一九〇三年)、「王本」の引用は『王刻聊斎志異校注』(斎魯書社、一九八八年)、「青本」の引用は『詳注聊斎志異図咏』(同文書局、一八八八年)を底本とした。

一　独歩が用いた底本

趙起杲が一七六六年に刊行した「青本」は、現存する『聊斎志異』の刻本中もっとも早期のもののひとつであり、その後何度も重刻され、なおかつ後代に出版されたさまざまな注釈本、図本の底本にもなっているため、『聊斎志異』の諸版本中最も重要かつ最も流布した版本であるといえる。「青本」を通じて、『聊斎志異』は民衆に知られるようになり、その影響力はヨーロッパにまで及ぶようになった(7)。藤田祐賢の前掲論文は国木田独歩の翻訳に言及しているものの、独歩がいかなる版本を使用したかについては問題にしなかった。また、後に山田博光が「聊斎志異と日本近代文学」(8)を発表し、黒岩比佐子が『編集者国木田独歩の時代』(9)を発表して独歩訳の『聊斎志異』を論じた。が、これらの先行研究は独歩が使った『聊斎志異』の版本の問題に全く触れないまま論を展開しており、恐らく独歩が他の翻訳者と同様、「青本」系統の何かを底本としたと想定したと考えられる。

黒岩比佐子の考察(10)によれば、矢野龍渓は清国特命全権公使として中国滞在していた一八九七年から一八九九年の間に『聊斎志異』の版本を手に入れ、帰朝後それを独歩に譲り、独歩は、矢野龍渓に感化されたことをきっかけに『聊斎志異』の翻訳に着手したという。黒岩比佐子のこの考証が正しければ、独歩が使った『聊斎志異』は、必ずしも当時日本で流行していた「青本」系統に属するものではない。

矢野龍渓が滞在した時期、中国には「青本」系以外にもう一つ『聊斎志異』の刻本があった。それは、王金範が一七六七年に版刻させた「王本」である。「王本」では、その序文で次のようなことが述べられている。

辛巳春，餘給事曆亭，同姓約軒，假得曽氏家藏抄本；公退之餘，乃擇其可觀者刪繁就簡，分門別類，手抄而點竄之，幾閱寒暑，始得成帙。

「拙訳」：康熙辛巳二十六年（一七六一年、筆者注）の春、余の給事歴亭・同姓の約軒、曾氏家蔵の鈔本を仮り得たり。公退の余、ここにその観るべきものを択び、繁を刪り簡に就き、門を分かち類を別けて、手鈔してこれを点竄し、幾たびか寒暑を閲し、始めて秩をなすを得たり。

王金範はこのように、一七六一年に「曾氏家蔵の鈔本」を入手し、その「鈔本」から作品を取捨選択して、さらに「刪繁就簡」の手を加え、「分門別類」して上梓したという。「王本」は、その刊行の前年に「青本」がすでに上梓されたことを知らず、自らが『聊斎志異』最初の刻本であると信じて出版されたものだった。したがって「王本」は「青本」系とは全く無関係の、独立した版本であるといえる。「王本」は全十八巻、二百六十七編の物語しか収録しておらず、また、全書を「孝」「勇」「智」「貞」「義」等の二十五の主題に分類しており、個々の小説の配列は通行本（ないし「青本」）と全く異なっている。儒教道徳に背く文章を削除することによって、「王本」は蒲松齢の原典に忠実であることを目指した他の版本とはまったく異なった性格を持った版本である。「王本」は二回しか重刻されず[11]、一部の地域で一時的に販売され、当時一種の稀購本となっていた。そのため、唐船によって日本に輸入された可能性は低い。しかし、光緒年間（一八七五―一九〇八）に「王本」の複刻本が出版された頃、矢野龍渓は中国に滞在しており、ゆえに中国で「王本」を手に入れた可能性もある。そして、黒岩比佐子[12]が考察したように、この版本の『聊斎志異』は彼を通じて国木田独歩の元にもたらされた。

では次に、一九〇三年五月に『東洋画報』へ掲載された「黒衣仙」と「舟の少女」の訳文を見ることにより、国木田独歩の手元に「王本」があったことを検証してみたい。「黒衣仙」が「王本」の「竹青」を翻訳したものであることは、次の三点によって検証し得る。

（一）「王本」が独自に削除したと思われる字句は独歩の訳文にもない。

（二）「王本」と「青本」に字句の異同がある場合、独歩の訳文はおおむね「王本」にしたがっている。

（三）「青本」になく「王本」にある字句は、独歩の訳文にもある。

この三点にしたがって、具体例を「独歩訳」「王本」「青本」の順に示してみよう。

（一）①

「独歩訳」：昔は支那の国、湖南という所に魚生という青年が居た。
「王本」：湖南魚生。
「拙訳」：魚生は湖南省の人である。
「青本」：魚容，湖南人。談者忘其郡邑。家綦貧。
「拙訳」：魚容は湖南省の人である。どこの郡邑かは、談者は忘れてしまった。家は貧しかった
（一）②
「独歩訳」：金はなくなる、食物はなし、宿屋には無論泊まることも出来ず、殆ど閉口してしまった。
「王本」：資斧乏絕。餓甚。
「拙訳」：旅費がなくなり、腹が減って堪らなかった。
「青本」：資斧斷絕，羞於行乞。餓甚。
「拙訳」：旅費がなくなったが、恥ずかしくて乞食もしなかった。腹が減って堪らなかった。
（一）③
「独歩訳」：眼が醒めて見ると、竹青は既に起きて立派な座敷に座っていて燭燈煌ヶしく照らしている。
「王本」：寢初醒，則女已起。見高堂中巨燭螢煌。
「拙訳」：目が覚めたら、女は既に起きた。立派な部屋には蝋燭は輝かしく照らしていった。
「青本」：寢初醒，則女已起。開目見高堂中巨燭螢煌，竟非舟中。
「拙訳」：目が覚めたら、女は既に起きた。立派な部屋には蝋燭は輝かしく照らしていた。自分がもはや舟の中にいなかったと悟った。
（一）④
「独歩訳」：舟子も奴僕も見て喫驚した。魚生も驚いて開いた口が塞がらない。
「王本」：舟人及僕，相視大駭。生亦悵然自驚。
「拙訳」：舟子と奴僕たちは見て大いに驚いた。魚生自身も驚いた。
「青本」：舟人及僕俱在，相視大駭。詰其所往。生故悵然自驚。
「拙訳」：舟子と奴僕たちは見て大いに驚き、魚が何処にいったか聞いた。魚はわざと自分も驚いた様子を見せてごまかした。

以上（一）①から（一）④は、「青本」の文字数が「王本」より多く、多い部分に該当する訳文が「独歩訳」にはないことに注意されたい。例えば、（一）①において独歩は、主人公の名「魚容」を「魚生」と簡略化して翻訳しており、「青本」にある「談者忘其郡邑、家綦貧（どこの郡邑かは、談者は忘れてしまった。家は貧しかった）」の部分も訳出しない。独歩の訳文は「王本」の「湖南魚生」（湖南省、魚生という人）と一致しており、独歩独自の判断というより、

「王本」に従ったものと考えられる。

つづいて（二）の「王本」と「青本」とに字句の異同がある場合について見てみたい。

（二）①

「独歩訳」：其処で舟子達にも十分の礼をやって無事に故郷へと帰り着いた。

「王本」：抵家厚酬舟人而去。

「拙訳」：家に着いた後舟子に多く報いて去った。

「青本」：於是南發達岸，厚酬舟人而去。

「拙訳」：そして南へ向って出発して岸に着いた。舟子に多く報いて去った。

（二）②

「独歩訳」：魚生は宅に居て二三ヶ月経つと忽ち漢江を思い竹青が恋しくなった。

「王本」：歸家数月，忽憶漢水。

「拙訳」：家に帰って数月後、漢水のことを忽ち思った。

「青本」：歸家数月，苦憶漢水。

「拙訳」：家に帰って数月後、漢水のことを苦しく思った。

（二）③

「独歩訳」：果たして赤ん坊が生まれたが胞衣が厚く身体を裏んでいる。

「王本」：果産，胞衣厚裹。

「拙訳」：果たして生んで、胞衣が厚く赤んぼを裏んでいる。

「青本」：果産，胎衣厚裹。

「拙訳」：果たして生んで、胎衣が厚く赤んぼを裏んでいる。

（二）①については、独歩訳にいう「故郷へと帰り着いた」が「青本」の「南發達岸」（南へ出発して岸に到達）よりは「王本」の「抵家」（家に到達）に近いものであることは明らかであろう。（二）②にいう「忽憶」と「苦憶」、（二）③にいう「胞衣」と「胎衣」は、ともにたった一字の差違に他ならないが、独歩訳がいずれの場合も「王本」の文字を用いていることがうかがえる。

つづいて（三）の「王本」に字句が「青本」より多い場合について、独歩は「王本」に従っていることがうかがえる。

（三）①

「独歩訳」：其処で舟子は船を出そうとしたところ、これはまた、船が砂に坐って動かなくなってしまった。そのまま船を守って二月余り泊まっていた。

「王本」：舟人欲他適，沙積膠舟，纜不能解，遂共守之。

「拙訳」：舟子は他のところへ行こうと思ったが、舟が

砂に陥没したように動けず、纜も解けなかった。ゆえに皆は一緒に舟を守っていた。

「青本」：舟人欲他適，而纜結不解，遂共守之。

「拙訳」：舟人は他のところへ行こうと思ったが、纜を解けなかった。ゆえに皆は一緒に舟を守っていた。

（三）②

「独歩訳」：其の後三年目に魚生は再び都へと試験を受けに出向いた。途中で先の水神廟に詣で

「王本」：後三年赴試，仍過故所，謁吳王。

「拙訳」：三年後、魚は再び試験を受けに出かけて、また例の呉王廟に経過して参拝した。

「青本」：後三年，仍過故所，謁吳王。

「拙訳」：三年後、魚はまた例の呉王廟に経過して参拝した。

二例においても、「青本」にはないが、「王本」にはある「沙積膠舟」と「赴試」の文章について、独歩訳には対応する訳文が見られる。ゆえにこの二例は独歩が「王本」を底本にした決定的な証拠だと考えられる。

他の例は割愛するが、（一）（二）（三）が示すように、「青本」と「王本」の字句が異なる場合、独歩訳は全て「王本」の異文に従って加筆修正されている。ここで検証した個々の例は、ある言い方をすれば、筆の勢いによる偶然に過ぎないという可能性もあるかもしれないが、「王本」の文章と偶然に一致する部分が九例以上も重なることはあり得ない。ゆえに、独歩が使用した底本が「王本」だったことはほぼ間違いないと思われる。

また、一九〇三年五月の『東洋画報』で「黒衣仙」とともに発表された「舟の少女」も恐らく「王本」所収の「王桂庵」を底本に翻訳されたものだと推測される。「舟の少女」は意訳・省略が多いため、底本の検証は困難であるが、次の一例などは、「舟の少女」も「王本」所収「王桂庵」を底本にしたことを証し得るのではあるまいか。

「独歩訳」：早速準備を整えて少女の家を訪ね、父なる江蘺に遇った、見ると例の舟子である。

「王本」：罷筵早返，謁江蘺。既見，始知即榜人也。

「青本」：罷筵早返，謁江蘺。

ここにいう「江蘺」とは主人公の少女の父の名であるが、「青本」は「江蘺」の名の後に何の説明も加えないのに対し、「王本」は「既見、始知即榜人也」（彼を見ると、例の舟子であることがわかった）の一文を置いている。独歩訳はこの一文と対応する訳文があるため、その底本はやはり「王本」だったと考えられる。

ところで「黒衣仙」「舟の少女」は、一九〇六年に独歩も

編集に加わって編纂された『支那奇談集』（近事画報社、敬業社刊行）に、後に『東洋画報』へ掲載された「石清虚」「姉と妹」（原題「胡四娘」）とともに、加筆修正なく収録された。この『支那奇談集』は、独歩訳の四編を含め、総計五十四編の『聊斎志異』訳を収録した（他に『子不語』からの翻訳を収録している）。同書は彩色付きで大判の挿絵も挿入した豪華版で、その後の日本における大衆的な『聊斎志異』人気を決定づけた重要な出版物にあたると思われる。この中で「黒衣仙」は巻頭の第一集第一篇として、美しく彩色された大判の挿絵とともに掲載された。図一がその挿絵である。

「図一」国会図書館デジタルコレクション
http://dl/ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/1872551（二〇一七年十一月二十二日）に拠る。

この挿絵には、主人公魚生が眠る姿（図像手前）、案頭に坐す呉王廟神（図像奥）、また、その中間に、黒衣が掛けられる魚生が描かれる。この挿絵は図二を描きかえたものだと思われる。

「図二」『詳注聊斎志異図詠』（同文書局、一八八六年）に拠る

図二は、一八八六年に中国同文書局によって出版した『詳注聊斎志異図詠』で「竹青」に付された挿絵である。両者を並べてみれば明らかなように、『支那奇談集』の挿絵は『詳注聊斎志異図詠』の挿絵を多少アレンジしたものにほかならない。また、『詳注聊斎志異図詠』の挿絵には下部に七言絶句の賛が賦されており、次のようなものである。

窮途無奈秀才飢　途に窮し 秀才の飢を奈ともするなし
多謝呉王賜羽衣　多謝す 呉王 羽衣を賜うを
分箇雛鬟為匹偶　雛鬟を分ち 匹偶と為す
従今雙宿永雙飛　今よりは雙に宿り 永に雙飛せん

図二は詩賛の第二句に歌われた「呉王　羽衣を賜う」という場面を絵にしたものであり、『支那奇談集』の挿絵も同様の箇所を描いている。

独歩が一九〇三年に「竹青」を翻訳した際依拠したと思われる「王本」には挿絵が付いておらず、『聊斎志異』の図咏本は「青本」系統に属するものである。ゆえに、国木田独歩は、一九〇六年『支那奇談集』を編輯した際、新たに「青本」系統の図咏本、即ち『詳注聊斎志異図詠』を目にしていたと考えられよう。

また、独歩が「黒衣仙」と「舟の少女」に次いで翻訳した「石清虚」は「王本」には収録されていない作品であることも、独歩が後ほど「青本」系統の本を手に入れたという推測を裏づけている。要するに、『東洋画報』の創刊にあたって矢野龍渓から「王本」を与えられた国木田独歩は、「王本」を通じて『聊斎志異』の魅力を知り、「黒衣仙」と「舟の少女」を翻訳した後、完本を求めてただちに「青本」系統の『詳注聊斎志異図詠』を手に入れたと考えられる。したがって、その後の二篇の訳（「石清虚」と「姉と妹」）、また『支那奇談集』の挿絵は「王本」ではなく、「青本」系統に属する『詳注聊斎志異図詠』に拠っているのである。

二　原典「竹青」と独歩訳「黒衣仙」

次に、国木田独歩はどのように『聊斎志異』を翻訳したかという問題について考えてみたい。「黒衣仙」が仮に「王本」の「竹青」を底本に翻訳されたものだとするなら、「王本」と彼の訳文とを仔細に検討することによって独歩訳の特徴を浮き彫りにすることが出来よう。

まず、「王本」における「竹青」の梗概を次に示す。

魚生は湖南の人であった。落第して帰る途中、呉王廟という水神廟で神を拝み、不平を訴えて眠ると、夢に廟神が現れ、彼に黒衣を与え、水路を守る神烏に変身させ、さらに竹青という烏の妻まで与えてくれた。魚生は仲間の神烏たちと毎日水路を往来し、船頭たちから餌をもらって神烏の勤めを果たしたが、ある日、舟に乗った兵士に胸を打たれて絶命する。目が覚めると、そこは元の呉王廟であった。それから三年後、魚生は再度受験するため呉王廟を訪れ、竹青を探すが見つからない。及第しての帰り道、再び呉王廟に立ち寄ると、その晩、竹青が人の姿で現れ、今は漢江の女神となったことを話し、魚生を漢江の私邸へと誘う。そこで数ヶ月ほど暮らした後、

魚生は湖南の実家と漢江の女神廟の間を自由に往来できる黒衣を竹青に与えられ、送別の宴に酔って眠ってしまう。目が覚めれば、魚生は故郷に帰る舟の中であった。それから数ヶ月後、漢江での暮らしが恋しくなって魚生が黒衣を着て訪れると、竹青はちょうど出産するところであった。生まれたのは男子で、漢産と名付けられた。魚生の故郷の妻・和氏には子供がなかったため、三ヶ月の約束で魚生が漢産を連れ帰ったところ、和氏はその子を非常に可愛がり、竹青に返さなかった。竹青は漢生、玉佩という男女の双子をさらに出産し、自身の手元に置いた。

和氏が他界した際、魚生、漢産、漢生、玉佩が葬儀に集まった。漢産と漢生はそのまま魚生の実家に留まったが、魚生は玉佩をつれて漢江に赴き、故郷には帰らなかった。

独歩の「黒衣仙」は以上のような内容をもつ「竹青」を翻訳したものであるが、翻訳とはいいながらも逐語訳ではなく、意訳も多ければ、省略も多い。

最も大きく異なっているのは、特に物語の後半部分、即ち漢産が生まれた後の話であり、独歩の「黒衣仙」はこの後半部分を改変したといっても過言はないほど大幅な書き換えが施されている。

以下に、独歩が省略した「王本」の原文と、その箇所に相当する独歩の訳文とを示してみよう。まず「王本」の原文である。

數年、漢産愈秀美。妻和氏、苦不育、每思一見漢産。生以情告女。女乃治任、送兒從夫歸、約以三月。既見。和愛之過於所生。年餘、不忍令返。一日、忽不見、和痛悼欲絶。生乃詣漢、入門、見漢産臥床上。喜以問女、女曰、「君久負約。妾思兒。故招之也」。生因所述和氏愛兒之故、女曰、「待妾再育、令漢産歸」。又年餘、女雙生男女各一。男名漢生、女名玉佩。生遂攜漢産歸。然歳恒三四往、不以為便、遂移家漢陽。漢産年十二、入郡庠。女以人間無美質、招去、為之娶婦、送歸。婦名巵娘、亦神女産也。後和氏卒、漢生及妹皆來會葬。漢生遂留、生攜玉佩去。自此不返。

「拙訳」:

數年にして漢産はいよいよ秀美たり。妻の和氏、不育に苦しみ、毎に漢産に一見せんことを思う。生、情を以て女に告ぐ。女、乃ち治任し、兒を送りて夫に從いて歸らしめ、約するに三月を以てす。既に見ゆ。和、これを愛すること生む所に過ぐ。年餘、返らしむるに忍びず。一日、忽にして見えず。和、痛悼して絶えんと欲す。生、乃ち漢に詣り、門を入りて、漢産の床上に臥するを見る。

喜びて以て女に問う。女曰く、「君、久しく約に負く。妾、兒を思う。故にこれを招くなり」と。生、因りて、和氏愛兒の故を所述す。女曰く、「妾の再育を待ちて、漢産をして歸らしめん」と。又た年餘、女、男女おのおの一を雙生す。男は漢生と名づけ、女は玉佩と名づく。生、遂に漢産を攜えて歸る。然れども、歳に恒に三四往して、便と以為わざるなり、遂に家を漢陽に移す。漢産、年十二にして郡庠に入る。女、人間に美質なきを以て、招き去らしめ、これが為に婦を娶り、送り歸す。婦の名は巵娘、亦た神女の産なり。後、和氏卒す。漢生、及び妹、みな來りて會葬す。漢生、遂に留まり、生、玉佩を攜えて去る。これより返らず。

以上のような原文に対し、独歩は次のように省略している。

「独歩訳」：この後絶えず往来して居る中に男女の双児が生れ、其の女の方を魚生の妻の和氏が貰えて育てることにした。

＊＊＊＊＊＊

魚生の終はよく解らない。竹青と共に仙化して仙島に隠れてしまったものらしい。

（おわり）

独歩は「竹青」の結び「自此不返」の一句を「竹青と共に仙化して仙島に隠れてしまったものらしい」と置き換えているから、「返」が魚生の故郷への帰還を指していると正しく理解していたのである。その上で、「王本」で二〇七文字もあった原文を（「青本」はさらに多い）日本語ではたった八〇文字程度に縮小した。そこには紙面の都合など編集方針等に関わる、やむを得ない事情があったという可能性もあるが、仮にそうであるとしても、独歩の訳文にある「其女の方を魚生の妻の和氏が貰て育てることにした」という改変は説明できない。

「王本」の原文は「生遂攜漢産歸（生はそこで漢産をつれて故郷に帰った）」、「漢生遂留、生攜玉佩去（漢生はそこで魚生の実家に留まり魚生は玉佩をつれて竹青のもとへ行った）」として、漢産（男の方）が和氏のもとへ行き、玉佩（女の方）が竹青のもとに留まったことを明瞭に述べている。それにもかかわらず独歩訳の「黒衣仙」は、女の方が和氏のもとへ行ったと書いている。

管見のかぎり、「玉佩（女の方）が和氏のもとへ行った」とする『聊斎志異』の異本はないため、独歩訳のこの部分はほかの版本を参考にしたという可能性も考えにくい。恐らく独歩は、末尾部分を簡略化してしまい、その結果、双子の女の方が和氏にしたがうという過誤を犯してしまったのである。

要するに、独歩にとって、出産事情や子育てを詳しく描い

た後半部分はこの作品の中で重要な内容ではなかったことがうかがえる。独歩訳の省略と誤訳は、彼が原文のもつ意味の重大さを理解しないからこそ生まれるのであって、その結果、原典の全体像さえもが見誤られてしまうこととなった。

魚生が竹青と再会を果たし、自身の故郷に連れ帰ろうとしたとき、魚生は「僕在此，親戚斷絕，且卿與僕名為琴瑟，而不一認家門，奈何（私がここにいたのでは一族は断絶する。それに、あなたと私は名目上夫婦でも一族にならない、というのはおかしいじゃないか）」と述べた。魚生は、人の世の男子として、一族を率い社会的に出世し、家を盛り立てていく義務を負う。これに対し竹青は、「無論妾不能往。縱往，君家自有婦，将何以處妾乎（私はとてもいけません。たとえいっても、あなたには奥様がいらっしゃるのです。どうして私が必要でしょう）」と答え、自身がそうした人の世の務めに関わらないことを述べた。その後、竹青は「不如置妾於此，為君別院可耳（私をここに置き、あなたの別荘とするにこしたことはありません）」と述べ、漢江における彼女の私邸がある種の仙界にあたることを主張していたのである。したがって、魚は黒衣を着って故郷と漢陽の間に往来した。

つまり原作においては、和氏との故郷での生活に人の世の勤めが、竹青との漢江での生活に心の安らぎと慰めとが、始めから託されていたといってよい。魚生は男子としての勤めを果たすために故郷に帰るのであり、世の喧噪に疲れると竹青を訪れる。竹青は、魚生が男子としての勤めを果たせるよう二人の跡取りを生んでやり、彼の家を盛り立てる。

そうであるとすれば、人間世界に留まったのは、息子の方でなければならない。それが、家系を男に任せ、男が科挙試験によって立身出世するという重大な意味を持つ結末であるからだ。魚生は一人の貧しい書生にすぎないとはいえ、人の世の男子として、一族を率い、出世して家を盛り立てていく義務を負う。魚容が科挙を受け、息子漢産を人界の学校に行かせる意味もここにある。科挙は役人の選抜試験であり、古い中国で書生が世間に認められるための唯一の手段とも言える。その時代において、作者蒲松齢のように、何十年受験しても合格できず自分の理想を実現できなかった書生は多かった。『聊斎志異』は蒲松齢が自分の不平を発散するために書かれた作品集として、科挙という大きなテーマを備えており、蒲松齢自身を含め不遇な書生たちを慰める本であるとも言える。「竹青」の場合、魚容は一回落第したが、二回目の試験で合格した。魚が合格した後、役人になる道を選んだかどうかは原文の中で書かれていないが、男としての責任は果たしたと考えられる。

そして、もう一つの義務は子孫を残すことである。魚容の言動から見れば、彼は最初竹青を自分の家に連れて行くつもりであったが、竹青は漢水の仙女であり、仙界から離れず、魚容の家に行かなかった。これが、黒衣を着て魚が人界・仙

界を往来する理由である。竹青は長男漢産を産み、一年後男（漢生）と女（玉佩）の双生児を産んだ。魚容は漢産を人界に連れて戻って学校に行かせており、自分がいなくなったら、息子に家を継がせる意図が明らかである。こうして、子供を産んでくれる竹青と、竹青の子供を我が子のように育てた人界の妻・和氏の助けによって、魚は人間の男としての責任を果たした。魚容・竹青・和氏は、三人とも自分がいる世界の原理に従って行動する人物である。魚容は竹青に仙界に招待されても人界の責任を忘れられず、竹青は漢水の女神として魚を愛しても漢水を離れず、和氏は正妻として妾に嫉妬せず子供を育てた。物語の末尾で正妻が死んではじめて、責任を果たした魚は家を息子に任せ、永遠に仙界に留まることができる。

つまり、息子を人界に残すことは、「竹青」において現実の持つ意味を反映する部分として、魚が最後仙界に行ったこととともに、現実世界と仙界の両方における幸せを意味している。仙界の原理、人界の原理に従うそれぞれの人物は交流して愛し合うと同時に、それぞれの立場は動かず、各人が自分の義務ないし責任を最後まで全うし、その結果、極めて円満な結末を迎える。これは作者蒲松齢が考える天地人生の最も理想な状態とも言えるであろう。

にもかかわらず独歩訳では、「女の方が人間世界に行った」という過誤が犯されている。ここから、物語の最も重要な骨組みの一つ、ないし現実世界の反映された部分を独歩が重要視していなかったと考えられる。彼は「竹青」に現実味を求めているわけではないため、作品に潜んだ作者の観念と思想とを見落としたのである。

三　原典「王桂庵」と独歩訳「舟の少女」

独歩が翻訳した「舟の少女」はかなり自由な意訳が行われているため、原文のもつ世界観を彼がどのように捉えていたのか把握するのはきわめて難しいが、原作「王桂庵」の梗概と独歩訳を比べるといくつかの問題点が見えてくる。

まず「王桂庵」のあらすじを示す。

大名の貴公子・王樨（字は桂庵）は南方へ遊びに行った際、隣に停泊した舟の中で裁縫をする少女を見初めて金や簪を投げかけるも、すべて黙殺され、やがてその舟は出航していく。王桂庵は舟を雇い、半年かけてさまざまに少女の行方を捜索するが、全く手掛かりはない。ある日彼は、舟で江南の小村を訪ね、合歓の花の咲く庭で彼女と再会する夢を見る。それから一年あまり後、彼は再度少女捜索の旅に出て、ある偶然から夢の景色に遭遇し、少女と邂逅する。少女は名を芸娘といい、孟江蘺という高潔な義人のむすめであった。王桂庵は少女の助言にしたがい、正規の手続きを経て芸娘を妻とする。

芸娘を連れて王の家へ帰る途中、舟に金や簪を投げかけた非礼を誹る芸娘に対し、冗談のつもりで「実は家に、良家から礼を尽くしてもらい受けた妻がいる」と嘘をつく。芸娘はこれを信じて激昂し、川に身を投じる。八方手を尽くして彼女を捜索するも見つからない。彼は家には居たたまれず、孟江蘺に合わす顔もないので江南の親戚の家に身を寄せてから一年あまりたったある日、帰宅の途中で雨に遭い、路傍の民家に雨宿りする。赤ん坊を抱いた老婆がいて、その赤ん坊が妙に人懐っこい。雨が止んだので出発しようとすると、その赤ん坊が「お父ちゃんが行ってしまう」と泣く。老婆が恥じて赤ん坊と共に奥へ入ると、一人の美婦人がその赤ん坊を抱いて現れた。なんと芸娘だったのである。芸娘は、身を投げた後に老夫婦に助けられ、その養女となって王桂庵の子を出産したのだった。王桂庵はその子を寄生と名付け、三人は幸せに暮らす。

原作「王桂庵」は「夢徴」（夢で見た事は本当となる）を主題の一つとした作品だと考えられる。独歩が定本にしたと思われる「王本」において、「王桂庵」は巻三の「夢徴」の項に「王桂庵　寄生附」という題目で、「寄生」という付録と合わせて収録された。この「寄生」とは王桂庵の子の寄生を指しており、「王桂庵」の後日譚がいわば息子の物語として付されている。興味深いことに、この「寄生」においては蒲松齢の評論、即ち「異史氏曰」が以下のように付されている。

父癡於情，子遂幾為情死。所謂情種，其王孫之謂與。
不有善夢之父，何生離魂之子哉。「拙訳」：異史氏曰わく、「父は情に痴にして、子は遂に情の為に死すに幾し。所謂情種とは、其れ、王孫（寄生の字）の謂か。善夢の父あらざれば、何ぞ離魂の子を生まんや」と。

ここで、王桂庵は「善夢の父」（夢を見るのが上手な父）であると言われているのである。「王桂庵」に「夢徴」という主題があるのは明らかである。国木田独歩もこの点を理解していたと思われ、「舟の少女」の全体を通しても、夢と再会を描いた「夢徴」の部分は出色の出来といってよい。

しかし、原作においては合歓の花が夢の中核として美しく描かれているのに対し、独歩訳には花の名が全く登場しない。たとえば原作は、夢の導入において次のようにいう。

有夜合一株、紅糸満樹。陰念詩中『門前一樹馬纓花』、此其是矣。
「拙訳」：合歓の木が一株あって、紅い絹のような花をいっぱいに咲かせている。ひそかに、詩にいう「門前の

また、再会の部分では次のようにいう。

一樹　馬纓の花」とはこれだなと思った。

一門内、馬纓一樹、景象宛然。

「拙訳」：門内には合歓の木があり、夢の世界さながらだった。

これに対し独歩の訳文は次の通りである。

樹木の配置から石の布き様まで、さながら詩中の景である（中略）内に入って見ると、夢に見たところと寸分違いはないので、

「門前の一樹　馬纓の花」という詩文と、「夜合」や「馬纓」に関する描写は全部削除された。原典の植物に関する内容が独歩から見れば重要ではないことがうかがえる。実は「夜合」と「馬纓」は合歓の別名であり[13]、作品全体と関わっている一つのキーワードである。この花の名が主人公王樨の「樨」という名や「桂庵」という宇、ヒロインの父の「江蘺」という名と呼応し合い、ヒロインの名の「芸娘」を生み、やがて息子「寄生」を派生させているともいえる。「夜合」とは、「夜間に対となって合する合歓の花の生態」に由来する言葉で、したがって「夜」や「夢」「歓会」の縁語である。物語全体はこの「夜合の花」の美しい連想の上に成立しているのであり、水草のような流れ者（「江蘺」）の娘が大地に根を張って耕され、桂の子を寄生させて幸福を得る、という一種の流転する人生観がそこに託されていると読むこともできる。独歩が、主人公「王樨」の名はおろか、桂庵という宇、息子寄生の名まで省略してしまったのは、原作の世界観を十分に理解しなかったといわざるを得まい。

よって、独歩訳において夢と再会の場面は以下のように簡略化された。

或夜の夢に河に沿た村（原文のまま、稿者注）に遊び、二三軒の家を過ぎてとある一軒の家の前へ来ると柴の戸南に開き、門内には疎竹をめぐらして籬を作って居る様如何にも風流なので、これは必定園庭だと心得、ズっと内に入り込んだ。樹木の配置から石の布さ様まで、さながら詩中の景である、（中略）見ると先年来捜しあぐんでいた彼の少女ならんとは、早速近づいて言葉をかけんとする矢先、少女の父が外から帰って来たので、あなやと思うと夢が醒めた。

独歩訳が漢詩と難解な字を削除した結果、原作の縁語に隠されている人生観と世界観は十分に表現されなかった。一方、「風流」や「詩中の景」などといった加筆によって、中国の

古典の美意識を自分の言葉で解釈している。彼の訳文は中国古典文学知識を持たない読者にとっても流暢に楽しめる文章であると言ってよい。

四　独歩の『聊斎志異』観

独歩は『聊斎志異』の原典の世界を十分に理解していない、ないし捉えようとする意図がないにも関わらず、「王本」「青本」を次々と手に入れ、翻訳にも手を染め、『聊斎志異』の選訳本ともいえる『支那奇談集』の編集にも加わった。彼は『聊斎志異』のどこに魅了されたのか。独歩は死の直前、病床で『聊斎志異』について次のように語った（『病牀録』による）。

> 『聊斎志異』は余の愛読書の一なり。（省略）特に支那の怪談に到りては、その思想の奇抜にして破天荒なる到底わが国人の及ぶ所にあらず。『聊斎志異』はその文字の豊富新鮮なる点に於いても、亦他に卓絶す。怪異譚は、民族空想心を最極度まで発揮せる者なり。又滑稽心を最極度まで発揮せる者なり。鬼神怪異を語らざる民族は、実相に役々として些かの余裕をも有せざる民族なり。(14)

もし独歩が一九〇八年に三十七歳の若さで病死しなければ、彼の『聊斎志異』に対する愛はさらに発展し、より多くの作品を残したに違いない。彼が『聊斎志異』に如何なる魅力を見たかということについて言えば、この『病牀録』の引用文からうかがえるように、それは「空想心を最極度まで発揮せる点」と「滑稽心を最極度まで発揮せる点」であると考えられよう。

原来、独歩は『東洋画報』の「怪談奇話」コーナーの一部として『聊斎志異』の話を訳したが、その後「支那物語」を独立したコーナーとして作り上げる意図があった。つまり、『聊斎志異』は彼にとって「支那」の幻想物語集であったと言える。その後、『支那奇談集』に向けて次のような広告文が打たれた。

> 東洋の文学は自ら一種の文学なり。就中支那文学の趣味は西洋以外別に一天地を為す。我国人は世界のすべての文学を知らざるべからず、今や西洋文学は之を猟渉して遺す所なからんとし、却って東洋の一大文学を忽諸にす。（中略）本社は国人に世界の文学の、総ての文学の趣味を与えんと欲し、支那の文学書中に就いて、最妙最奇の好評ある物語を抜粋し、毎月一冊ずつ之を刊行す。絶奇の事、絶妙の文、人若し之を繙かば必ず巻を措くあたわざるべし。(15)

二篇の文章を合わせ読むならば、独歩らは、西洋文学をあらかた猟渉し終え、そこにはない「空想心」と「滑稽心」の発露を『聊斎志異』等の中国文学に見出した、ということになるだろう。

独歩は『聊斎志異』の持つ幻想文学としての芸術性を重んじていた。ゆえに、翻訳の際も、「空想力」と関わる部分を丁寧に訳し、更には補足を行ったことさえある。例えば、「竹青」の場合、「黒衣仙」という新たな題名が付けられており、原典の「空想力」を反映する最も重要な道具が強調される。また、魚生が竹青から黒衣を受け取る場面を以下のように訳した。

枕邊一袱，檢視，則女贈衣履并黑衣俱在。

「拙訳」：枕の傍に一つの袋があった。中に検査すると、女が贈った衣服と靴、また例の黒衣もあった。

「独歩訳」：見ると枕元に襆包みが置いてある、中を検めると竹青が呉れた黒い衣服が入って居る。

原文において、竹青が魚生に与えたものは黒衣だけではなく、服も靴もある。恐らく魚生が帰り道で着替えるために、用意したものである。この細かな描写によって、竹青の優しさ、夫婦の愛情を表したのだろう。しかしその一方、肝心な黒衣は目立たず、「黒衣」と「服と靴」の意味も重ねられている。独歩訳では「服と靴」の内容を削除した。竹青の優しさは少し見えにくくなるものの、最も重要な道具――黒衣に視線を集めることができる。もう一例をあげたい。

因潛出黑衣著之，翕然淩空，經兩時許已達漢水，（省略）竹青出，命婢嫗為緩結，覺毛羽劃然盡脫。

「拙訳」：魚は潜んで黒衣を出して着て、速く空を飛んだ。二時間ぐらいが経って、漢江に着いた。（中略）竹青は出てきて、下女たちに魚の羽衣を脱いでくれると命じた。魚は羽が体から全部脱落したと感じた。

「独歩訳」：早速黒い衣服を出して着ると、ふわりと身は空中に浮び、何時か生えた翼を振って、漢江さして飛んで往った。二時間も經ぬ間に漢江に着いたので、（中略）竹青は出て迎え、先づ女中に命じて羽翼を脱がすと、見るまに毛が消えて一枚の黒衣となってしまった。

文脈によれば、黒衣を着ると魚に翼が生え、鳥となるのだが、「王本」では魚の鳥の姿を書いていない。ゆえに、魚が人間の姿のままで、空で飛んでいるという誤読も生じかねない。

それに対して、独歩訳は翼を生じて飛ぶ、羽衣が黒衣に復旧するなどの描写を書き加えた。文章が首尾一貫したものとなるとともに、物語において人が鳥に変身する不思議さが強調された。

『聊斎志異』に託された作者蒲松齢の人生に対する感懐を十分に捉えなかったが、独歩訳は原典の漢詩や難解な字句を減らし、さらに加筆を加えた。それによって、原典の思想は全てが表現されず損なわれたが、そのストーリーの面白さを知識人だけではなく一般人にも伝えられるようになった。特に、彼が使った「王本」には誤字があり、文章の通りがよくないところもある。通っていない文章に対して、独歩は自分の言葉で添削を施した。例えば、竹青が子供を産む時の、魚生との対話である。

生戲問曰：「胎生乎？卵生乎？」女曰：「妾今為神，則皮骨已硬，應與昔異。」

「拙訳」：生は冗談に聞く：「胎生ですか？卵生ですか？」女が曰く：「わたくしは今神であるから、皮と骨がすでに硬くなり、昔と違うはずです。」

「独歩訳」：「わたくしは今では神仙の身の上ですから昔の鳥とは違って居ます」と答えた。

胎生あるいは卵生の問題は、体が硬いかどうかとは関係ないはずである。そのため「皮と骨がすでに硬くなり」は魚の問いに対する答えにならないと思われる。（「青本」によれば、この「硬」は誤字であり、本来が「更」、「変わる」という意味である。）これをそのまま直訳すれば、文章は誤解を生むものとなりかねない。独歩訳ではこのフレーズを削除することにより、文章の通りがよくなっている。

独歩以前の『聊斎志異』の翻訳については、日本最初の『聊斎志異』訳本であり、「王桂庵」「細柳」「寄生」「恒娘」「五通」という五篇を擬古文体で訳した神田民衛の『艶情異史：聊斎志異抄録』（明進堂、一八八七年）が挙げられる。選ばれた話は全部男女の恋愛に関わるものであり、題名の示している通り「艶情」にまつわるものしか収録されない。このような選出がなされた背景には、江戸時代以来、中国明代の『剪灯新話・牡丹燈記』を代表として人間と幽霊の恋愛事情を描いた怪異と艶情に溢れた話の受容からの影響が大きかった。『艶情異史』は正にこの傾向を反映しており、この意味で、『聊斎志異』の訳本でありつつも『牡丹燈記』の受容の末端にもあたると言える。それに対し独歩訳は『艶情異史』や『牡丹燈記』と明らかに区別される。独歩の訳した四篇は男女恋愛とは無関係であり、知遇の恩（「石清虚」）、人情（「姉妹」）に関する話もある。男女恋愛を描く「黒衣仙」

に関しても、上部で考察したように、独歩訳の働きによって、原典の恋愛事情より空想的な要素の方に焦点が当てられている。独歩が『聊斎志異』の典型的な話柄と見なされていた「艶情」より、『聊斎志異』の幻想性の方に傾倒していたことは明らかである。

独歩訳以後、一九〇五年に近事画報社から出版された『新古文林』での蒲原有明訳『聊斎志異』八篇[16]も、男女恋愛を描いた「香玉」以外は全て、幻想性に富んだ短編である。また、『支那奇談集』に収められた『聊斎志異』と『子不語』も、珍聞怪談に類するものが多く、題材は男女恋愛の枠から大きく逸脱している。つまり独歩訳によって、『聊斎志異』は知識人たちに賞玩される艶情なものではなくなり、通俗的なファンタジーとして訳されるとともに愛読され、大衆にも親しみやすい中国の幻想物語集として日本側に受け入れられつつあったと言えよう。

注

（1）藤田祐賢「「聊斎志異」の一側面――特に日本文学との関係において」（慶応義塾創立百年論文集、一九五八年）

（2）大賀順治編集、近事画報社出版、単行本の体裁で月一回発行、計三編。

（3）磯部祐子「江戸時代における『聊斎志異』の受容：『蛤洲餘珠』を例に」、『富山大学人文学部紀要』、二〇一六年。

（4）一七六六年、浙江杭州、趙起杲、鮑廷博等編集、刻印、総計十六巻、四三一篇、木印。

（5）邦訳本と翻案の状況は、常石茂「解説――蒲松齢と『聊斎志異』」（増田渉・松枝茂夫、常石茂訳『中国怪異譚　聊斎志異』第一巻、平凡社、二〇〇九年―二〇一〇年）、藤田祐賢「解説」（増田渉・松枝茂夫・藤田祐賢・大村梅雄訳『中国古典文学全集　聊斎志異（上）』、平凡社、一九五八年）に参考する。

（6）一七六七年、山東省長山県刻印、王金範（原長山県令）編集、総計十八巻、二六七篇、木印。

（7）『聊斎志異』の英訳について、一説によると、「種梨」「罵鴨」の二篇がアメリカの宣教師Samuel Well Williamsによって翻訳され、彼の著書The Middle Kingdom（一八四八年）に収録されたのが『聊斎志異』の初訳である。また、『聊斎志異』の選訳書としては、一八八〇年にHebert Allen Gillsによって出版されたStrange Stories from a Chinese Studio がある。いずれも、底本に「青本」を用いていると言われる。「青本」は、欧米における『聊斎志異』の受容史で重要な役割を果たしていたのである。朱振武、楊世祥「「聊齋誌異」在英語世界的百年傳播（一八四二―一九四九）」（『蒲松齡研究』一月号、蒲松齡記念館、二〇一五年）を参照。

（8）『世界と日本』、帝塚山学院大学、一九九二年三月。

（9）角川学芸、二〇〇七年十二月。

(10) 黒岩比佐子は、蒲原有明と斉藤弔花の証言を引用し、矢野龍渓が帰朝後（一八九九年末）熱心に国木田独歩に『聊斎志異』を薦めたこと、また、翌年独歩の机の上に『聊斎志異』が何冊か置かれていたことを指摘した。

(11) 乾隆乙巳（一七八五）年郁文堂重刻本がある。また、光緒年間、王毓英は『聊斎志異新本』と改題し、重刻本を出した。

(12)『編集者国木田独歩の時代』、角川学芸、二〇〇七年十二月。

(13) 青本」系の「王桂庵」に付された呂湛恩の注釈は「群芳譜：合歓一名合昏、一名青棠、一名夜合」といい、また、孟繁海、孟原注『王刻聊斎志異校注』（斎魯書社、一九八八年十月）において「夜合」の注釈は「夜合花、又稱馬櫻花」ともいう。

(14) 国木田独歩『病牀録』『定本国木田独歩全集』第九巻、学習社、一九七八年。

(15)『支那奇談集』の広告の引用は黒岩比佐子『編集者国木田の時代』（角川学芸、二〇〇七年）を参照した。

(16)『新古文林』第一巻第一号の「香玉」、第五号の「木彫美人」「橘樹」「蛙曲」「鼠戯」「戯縊」「諸城某甲」「紅毛毡」。

【付記】本稿は日本比較文学会第五十一回関西大会（二〇一五年十一月二十八日、於大阪大学）における口頭発表「国木田独歩訳の『聊斎志異』」の内容をもとに増補を加えたものである。

（ちんちょうがい／本学大学院博士後期課程）